

マツ並木歴史ばなしあれこれ②

前回に引き続き、笠取峠のマツ並木保存管理計画策定の際に、古文書等の調査から解ってきたマツ並木の歴史に関わることについてご紹介します。

笠取峠の並木の動向

並木の員数や規格等がわかる史料は、調査期間に限りもあり、解った範囲のものではありますが、一覧にすると次のとおりです。

年 月 日	並木の長さ等	並木の本数等
正徳5 (1715) 年3月25日か	なし	古来並木松：157本、当年御植小松：235本
延享元 (1744) 年11月10日	12町ほどの間	並木143本
延享元 (1744) 年11月25日	なし	並木143本
寛政12 (1800) 年	なし	南側30本・北側43本の(描画)
天保13 (1842) 年か	なし	北側88本 外小木11本、南側53本(文字で記載の数)
天保15 (1844) 年	11町11間	松並木151本 外ニ65本小木苗木植え付共に南側52本と小木苗木19本、北側99本と小木苗木46本
弘化2 (1845) 年10月	12丁46間3尺 (南309間、北457.5間)	松並木145本 南側48本、北側97本、外ニ602本此度小苗木植付 (天保15年に比して6本少ない分は雪折れ)
安政3 (1856) 年	なし	松並木126本(南側：47本、北側79本)、外ニ623本小苗木
年次不詳 ※松の本数から安政3年以降の江戸期と推定	12丁46間3尺 (南309間、北457.5間)	南側：「松御並木299本 内255本小苗木」北側：「松御並木335本 内255本小苗木」(成木は、南側44本、北側80本)
安政6年以降でそれに近い	宿内両側670間	本数記載なし ※670間は11丁10間にあたる
慶応4 (1868) 年	11丁10間	本数記載なし

今回の調査で解ってきた並木の本数の変遷等

- 並木の本数は、成木レベルでほぼ120~150本程度で推移
- 並木の長さは、19世紀後半では、11丁10間(670間)という数値が一つの基準となっている。
- 数百本程度の植え込みが何度か行われても、必ずしも成木の本数が増えないのは、マツの生態的な特徴から、一定のスペースで成木として維持されうる本数には自ずと限界があったと考えるべきか。
- 街道沿いの南側、北側にマツはあるが、それぞれの員数がわかる史料の全てにおいて南側が北側より少ないことがわかります。これは、並木敷地そのものが北側の方が長いので、補植する場合にも南側を無理に補おうとはしなかったと思われます。

江戸期を通じて植栽が繰り返され、幕末まで続いた並木は、明治維新の激動期をも乗り越えて今日まで続いています。